

燕金属加工産業の歩み

寛永年間（1624～43）、天領の燕村は、信濃大川の沿岸に位置した集落であった。信濃川の氾濫のたびに粒々辛苦の稲がことごとく流れ、農民は困窮し果てていた。

寛永3年（1626）、出雲崎代官大谷清兵衛正次が領内の燕郷を巡視して、農民の塗炭の苦しみを見、これを救うため、江戸から和釘鍛冶を招いて農民に伝習させ、副業として奨励したのが、今や世界に飛躍する燕金物産業の基盤となったのである。

天和年間（1681～83）には、燕町内と農家の和釘鍛冶職人たちは、合わせて約千人を数え、若狭国の小浜とともにわが国の二大産地として有名になった。

元禄10年（1697）の江戸の大火の際、燕の和釘は、三条の金物問屋を経て、信濃川の舟便で、六日町から江戸へ運ばれた。また、大火後の江戸城の復元に、燕町から腕利きの鍛冶職人が大勢出稼ぎに行った。

元禄年間の初期、弥彦山うらに間瀬銅山が開坑したが、仲町の玉橋兵七は、間瀬に移住し、銅の精錬工場を施設して、燕町に大量の丁銅を送った。そして銅鍋・銅ヤカン・爛つけ鍋などが生産されるようになった。鉄製品と異なって火の通りがよく、長持ちするので、銅製品はなかなかの好評を博し大量増産された。

明治27年（1894）ころ、洋釘の輸入と国産化により、燕の和釘鍛冶は大打撃を受け、銅器鍛冶その他に転職した。しかし、同42年頃になると、全国的不況と琺瑯・アルミ製容器の普及で、鍛冶職人らは苦境に追い込まれ、信濃川支流開削の大河津分水工事に稼ぎし、辛うじて糊口をしのいだ。

明治44年（1911）4月、燕町で初めて手造りの洋食器が生産された。その後、洋食器は大量に機械生産されるようになったが、昭和16年（1941）12月、わが国が太平洋戦争に突入すると、多くの工場が軍需品生産工場に転換した。

終戦を機に、燕金属工業組合は平和産業に切り替え、燕周辺農家の余剰労力を吸収して、再び洋食器の製造を始めた。そして優秀な各種金属製品を生産して、アメリカをはじめ世界の各国に輸出している。遠く和釘鍛冶の時代から、幾多の試練に耐えながら培われて来た燕の金属加工の技術は、文字通りの不死鳥のごとく蘇ったのである。

燕市の基幹産業は金属洋食器と金属ハウスウェア（卓上用品・台所用品中心）であるが、鋳起銅器などの伝統技術を保存しながら、自動車部品・医療器具・ゴルフクラブ・精密機械部品・農業用機械など多岐にわたっている。産業史料館は、燕金属器産業の開拓と変遷を教えてくれる。